

|                  |   |
|------------------|---|
| Title            | ヘーゲル哲學に於ける結合の概念：時間論的耕鋤的基礎的研究の一  |
| Sub Title        |   |
| Author           | 山口, 等澍(Yamaguchi, Toju)   |
| Publisher        | 三田哲學會   |
| Publication year | 1933  |
| Jtitle           | 哲學 No.10 (1933. 2) ,p.75- 102   |
| JaLC DOI         |   |
| Abstract         |   |
| Notes            |   |
| Genre            | Journal Article   |
| URL              | <a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000010-0075">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000010-0075</a> |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# ヘーゲル哲學に於ける結合の概念

——時間論的耕鋤的基礎的研究の一——

山口 等 澍

カントの哲學は對象と主觀との二元性を以つて始まり、斯かる二元性を一元的なものに結合しようとしてかの先驗性が説かれ、範疇、統覺、圖式、構想力、經驗の類推、判斷力批判等が説かれたと見ることが出来る程であるにも拘らず、然も彼は竟にこの二元性を克服することが出来ないでまた二元性の儘に終つたと見ることが出来る。彼のあらゆる苦心にも拘らずその判斷力批判、實踐理性優先、及び觀念論々駁等の間にはどうしても調和されない對立的な何物かゞ残るとされ、結局彼の哲學は體系的に二元的にその内容の二つの部分が對立した儘で終つた。物自體の問題、二律背反、現象界と叡知界との對立の問題は竟に彼に於ては運命的であつ

たと見える。二元を一元にしようとするのがその先驗的といふことの根本課題であつたことを思つて茲に至れば人は唯だカント哲學の運命的な一循環を見て此の大哲の生涯の哲學的苦心が結局無意味であつたのではないかと考へるかも知れないが、それは事實の内容を知らざる幼稚な考へである。その一循環——例へば物自體を考へずばカントの哲學に入るを得ず、物自體を考へてはカントの哲學を理解するを得ずの如き——は決して無意味である筈はないことは言ふ迄もない。見様に依つてはやがてヘーゲルの辨證法に明にされる如く、それが人間精神の努力、哲學の本質的過程であり、運命であるとも考へることが出來よう。而してまたその點にこそカント哲學が結合の問題に於いて最も苦めるものであり、従つて該問題的に最も廣範圍に亘り全般的に觸れてゐる所以である。人はヘーゲルやフイヒテに於いて結合の問題が實に心地よく手際よく一原理的に見事に説き去られてゐるのを見る。がそれは一面に於いて大まかであり、一本調子であると言ふことも出來る。カントに於いては結合の問題が實に複雑に種々の形態のもとに苦しみ考へられ然もそれが克服されてゐないのを見出だす。がそこに吾

吾は哲學的に却つてより多くのものを學び得る。問題の取扱ひ方が深く廣く根強い。故にクロローナーなども言へるが如くこのカントの苦心ありてこそ、それが豫想されてその礎の上に始めてフイヒテ、シェリング、ヘーゲルの結合問題的な完き實が結ばれたのであると考ふべきであらう。(註二)

さてカントにありては結合統一の問題は最初より最後まで常に問題であつた。然るにヘーゲルにありては其の點全く趣を異にする。ヘーゲル哲學に於てはカント哲學に於ける意味に於ては結合の問題が存しない。二つのものが結合される、何か一つの第三者に依つて結合されるといふことが問題にならない。結合の問題はヘーゲルにあつては全く既に本質的に完了してゐる。その哲學の内容そのものの中に結合が包含されて説かれてゐる。即ちヘーゲル哲學は結合の問題の完成された状態を有してゐる。故に彼の哲學に於ては結合しようといふことが問題にならない。その點全くカントの哲學と相異してゐる。結合はその本質上內的必然的のことであつて今更結合しようとするものがヘーゲルに於ては意味をなさない。人はその理由を該問題に對する哲學的論究はカント哲學を繼承

發展せしめしものとしてのフィヒテ、シエリングに於て既に行きつくところまで行き、それがかくて克服されて了つたといふ事に歸するかも知れない。が何れにもせよ、ヘーゲルに於ては對立的な二つのものは必ず統一さるべき、又は既に統一されてゐるものと考へられ、その兩者の間に少しもカントに於けるような罅隙<sup>ニ</sup>が見られない。例へばヘーゲル哲學に於ける根本をなす理性及びその理念は *an und für sich* に真なるものであり、それは既に概念性(主觀性)と客觀性との絶對的統一である。それは主觀—客觀 *das Subjekt-Objekt* であり、觀念的イデアルなものレと實在レなものとの統一であり、有限的なものルと無限的なものとの統一であり、通常對立せるものとされる所謂精神と肉體との統一である。この二元的なものル、對立的な二つのものの絶對的統一、それがヘーゲルの理性であり、精神であり、理念であり、從つて絶對的眞理である。(註二)

ヘーゲルに従へば一切の事物は個別的であり、それは自身に於て一つの普遍性、又は内的本性 *innere Natur* であり、或ひは個別化されてゐる普遍 *ein Allgemeines*, *das vereinzelt ist* である。つまり普遍性と個別性とは一切の事物に於て區別され

るが然し同時に同一である。unterscheidetであるが identisch であるから結合が問題にならない。既に結合されてゐるのである。特殊は普遍であり、個別は普遍である。もつと明確に論理的に突き詰めて言へば主語は述語である。Das Subjekt ist das Prädikat. 両者は常に同一であり、既に統一されたものとして考へられてゐる。従つて概念の各契機はそれ自身、全體概念であり、概念は通常考へられるように抽象的なものでなくして絶對的に具體的なものとして考へられなくてはならない。かくて個別の中に普遍の意義があり、個別と普遍、普遍と個別、現實と理性、理性と現實、全體と部分、部分と全體が同一の内容と意義を有する。(註三)かくの如くヘーゲルに於てはカントの意味に於けるが如き結合の問題は全く問題にならない。總ては既に必然的に結合されてゐる。內的必然的に統一されてゐる。結合統一しようとしなくても結合統一されるものと考へられてゐる。本來は結合しようといふような事を言ふのが抑々誤りである。何となれば、結合といへば結合されるものが結合なくしても獨立に存在すると考へられなくてはならない。何れの二元論的體系に於ても特にカントの體系に於ける根本的缺陷の一つは、一瞬前には

對立して獨立的に存するものとして換言すれば結合されないものとして斷言されたそのものを結び付けようとする自家撞着からくるときへ彼は自身述べてゐる。(註四)以つてヘーゲルが如何にカントが持てあましたる結合問題の難點を克服せるかを見るべきである。而しこの根本思想がやがてまたヘーゲルの思惟そのものの本性たり原理たり方法たる辨證法の原理の生ずるところに外ならない。依つてこの視點よりして辨證法を少しく考察してみよう。

ヘーゲルに従へば、或るものは別の他のものになる *Etwas wird ein Anderes* 然しながらその他のものは自身一つの或るものである。斯くしてそれは同様に他のものになる。そして斯様にして無限に進む。或るものはその本質上、必然的に他者になる。そしてそれは又內的必然的に他者へと轉化する。かくして無限に發展 *entwickeln* する。故に結合するものを要しない。結合するものなしに內的必然的にそれ自身が他者に『なる』のである。すなはち辨證法は *immanent* な *Hinausgehen* であり、*innere Negativität* であり、それに於て悟性規定の一面性と制限性がそれらがあるところのものとして換言すれば否定性として自己を表はすのである。

かくして、あらゆる有限的なものは自己自身を止揚 *Aufheben* するものである。

従つて辨證法的なるものは、學的進展を動かす *Sein* を形成し、そして其れに依つてのみ内在的聯關と必然性が學の内容の中へ來り、同様にそのうちに一般に有限的なものを越ゆる真正にして外的ならざる高揚が存してゐる原理であり、それはあらゆる自然的且つ精神的な活動性一般の原理である。(註五)

故に理念は本質的には過程 *Prozess* である。何となれば、理念が絶對的否定性、従つて辨證法的である限りに於てのみ、理念の同一性は概念の絶對的にして且つ自由なる同一性であるからである。理念は経過 *Verlauf* である。即ち概念が個別性であるところの普遍性として自己を客觀性及びその反對のものにまで規定し、且つ概念をその實體とするところのこの外部性 *Äußerlichkeit* がその内在的 *Immanent* な辨證法に依つて主觀性に還元する経過である。理念は過程であるが故にこの點から言へば絶對者を屢々記さるるが如く有限と無限との統一とか、思惟と存在との統一等と表現するのは誤りであると言ふべきである。何となれば統一とは抽象的な靜かに固定した同一性を表現するからである。理性は實體であ



ると同時に無限の力である。あらゆる自然的及び精神的生活の無限の質料 *Stoff* であると同時に無限の形式である。方法は同時に本質であり、形式は同時に内容である。方法はその純粹なる本質性に於いて全體の建設以外の何物でもなく、認識する働きが方法であり、概念それ自身の運動が方法である。自ら規定し自ら實現する運動であるところの普遍的絶對的活動が方法である。すなはち哲學の眞の方法は内容の內的自己運動の形式に就いての意識である。従つてこの運動乃至活動性を外にして眞理の本質は存しない。そしてこの事は無の認識に關していつても亦然りである。理性の活動を外にしては無の問題も考へらるべきものではない。一切は理性である。理念である。その外の何物でもない。つまりヘーゲルの *Uebergehen* は *Werden* に外ならず、ヘーゲルはヘラクライトスの『萬物流る』を *Alles ist Werden* と解したものと云ひ得る。(註六)

かく理念はそれ自身辨證法であり、本質的には過程であり、否定また否定と無限に發展しゆく過程であり、従つてまたそれは他面に於いて統一又綜合といふ結合作用を繰り返しゆく *Uebergehen* の過程であり、運動である。従つて方法、形式が同

時に本質、内容であり、概念が客観性であり、対象が理念であり、「するもの」が「されるもの」であり、何れも通常の場合に對立すると考へらるる二つのものが同一である。向自的に自己の内容を自己自身として直観する概念の純粹形式が絶対的理念である。かゝる理念が眞なるもの、永遠なるもの、絶対的な力を有するものである。これ以外にはこの世界に於いて啓示されるものは存しない。理性は理性の前提であり、理性が取扱ふものは理性以外の何物でもない。理性の対象は理性であり、認識するものとされるものが同一である。夫れ故にヘーゲルに於いては、理念は眞理であり、絶対者であり、統一とは絶対的にしてそして一切の眞理、自己自身を思惟する理念 *die sich selbst denkende Idee* であり、思想するヌースと思想されるノエトンとは同一である。 *ὁμοτιτύχου νόου καὶ νοητοῦ.* (註七)

或るものは別の他のものになり、それはまた別の他のものになる。辨證法的契機は有限的諸規定の *das eigene Sichaufheben* であり、且つそれと對立して置かれたものへのその移り *Uebergehen* である。自己同一的なものを差別されたものから、主観的なものを客観的なものから、有限的なものを無限的なものから、精神を肉

體から分離し區別するのが絶對的理念としての辨證法である。そしてその限りに於てのみ理念は永遠の創造 *Schöpfung* であり、永遠の活動性 *Lebendigkeit* であり、且つ永遠の精神 *Geist* であり、また絶對者 *das Absolute* である。かく考へ來ればヘーゲルに於ては結合し統一するといふ側面よりも寧ろ區別され個別化(個物化)される側面が重んぜられて説かれてゐるとさへ言ふことが出來、そしてそこに止揚、發展、創造、活動などが説かれてゐると見ることが出来る。又は少くとも、カントに於て結合が問題とされてゐるだけヘーゲルに於ては同時に區別され分裂する側面が説かれてゐると見ることが出来る。即ちヘーゲルに於ては綜合され統一される結合されることはその哲學の本質上既に內的必然的の事であり、個別的なるものは必ず止揚され發展せしめられることに依つて結合されるものである。故に寧ろヘーゲルに於ては結合、統一の側面によりも個別化、分裂の側面に重心が置かれてゐるように見える。そのことはまたヘーゲルの判斷論に於て見らるる顯著なる一點である。すなはちヘーゲルの判斷論にあつては、主語は述語に於てその明白な規定性と内容とを有つのであつて、従つて主語自身は單なる表象或ひは空虚

な名に過ぎないのである。判断は、概念の眞の特殊性であり、依然として普遍性としてのこる概念の規定性或ひは區別である。概念の自己活動に依つて指定されたところの、概念の之の諸契機の區別への分裂が判断である。根源的一者の根源的分割が判断である。故に判断の意味は概念の特殊化と解されねばならぬ。つまり判断とは、ヘーゲルに従へば、向自的に存在し且つ同時に自己と同一なものとして指定されるけれども然し相互に同一なものとして指定されなところの概念の諸契機を區別する關係としての特殊性に於ける概念である。Das Urteil ist der Begriff in seiner Besonderheit, als unterscheidende Beziehung seiner Momente, die als für sich seiende und zugleich mit sich, nicht mit einander identische gesetzt sind. (註八) 故にカントに於ては判断は包攝し統一し綜合する作用であつたが、ヘーゲルの判断論に於ては寧ろ分裂、特殊化、分析の側面が強調されてゐるとみることが出来る。その意味に於て絶對的認識の方法は分析的であり、weitere Bestimmung は總べて絶對的認識の中にのみ見出だし得られるといふ事ができる。換言すればそれは die Offenbarung der Tiefeであり、精神の國 Geisterreich の Kelch の奥底より無限に湧き出

でてくる Dasein の絶對的概念であると思ふことが出来る。自己を産み出だすこと、自己をそれ自身の對象となすこと、自己に依つて知ることが精神の仕事である

## (註九)

かくの如くヘーゲルに於ては多を一に結合するといふ側面よりも一が如何にして多に發展分裂すべきかを説くことに力がそそがれてゐた觀がある。従つてこの意味に於てヘーゲルにあつては結合の問題が問題とならなかつたと言へるのである。かく分析的でありしカントにとつて結合が困難な問題となり、綜合的でありしヘーゲルにとつて結合の問題が自明なことであつたといふことは、例へばストア學徒とエピクロス學徒の各出發點が始め相對立し、然もこの事實上の終局點に於てはストア學徒は所謂エピキュリアンとなり、エピクロス學徒は之に反して所謂ストアックなものとなり、各々その出發點を入れ換へたるが如き現象を生ずるに至つたといふ哲學史的イロニーと共に、後來の哲學するものにとつて極めて示唆するところ多しと言はなければならぬ。つまり、カント哲學は分析的であつたからカントに於ては分析の側面は問題とならずして寧ろ結合が問題とな

り、ヘーゲル哲學は綜合的であつたからヘーゲルに於ては綜合の側面は必然的のことと考へられ、寧ろ分析、分裂が問題となつたのであるといふ一見反對的現象を生ずるに至つたのである。然し本質的且つ全般的にいふならばヘーゲルに全く結合統一の問題が存しなかつたのではない。否、大にあつたのである。ヘーゲル哲學が綜合的であつたといはれるのはそれを證してゐる。寧ろヘーゲル哲學の本質は綜合にあつた。綜合、結合は本質的內的必然的に自明のこととされたのであつた。辨證法の止揚に於ける働きの少くとも一半は綜合的統一の結合的な點に存したのであり、より大なる綜合を目的として分裂、個別化が説かれたとみるべきであり、ヘーゲル自身も、有と無との統一 *die Einheit des Seins und Nichts* とか、主觀と客觀の統一 *die Einheit des Subjekts und Objekts* とか、現實的に自由なる意志といふのは理論的精神と實踐的精神との統一であるとか、哲學は藝術と宗教との統一である等常にこの問題を考へてゐる。また一般にヘーゲルが A・B・C と分けて説く場合には C は何時も辨證法的に A 及び B の止揚的に綜合、統一されたものとみらるべきである。その意味に於て眞理とは實に綜合的統一の結合(の働き)を意味

すると考へられた。かくしてヘーゲルの論理に従へば、分裂そのことが綜合であり、綜合そのことが分裂であり、個別と綜合は同一であつたとみるべきである。すなはち、ヘーゲルに於ては結合の問題が考へられなかつたのではない。結合はヘーゲル哲學に於て本質的のものであつた。然しヘーゲルに於てはカントに於けるように結合される二つ又は多くのものありてそれを或る別の一つのもものが結合するといふようには考へられずして、一つのもものは内的必然的に他のものになる、發展する。即ち辨證法的に發展する。そしてそこに結合は始めから既にその中に内在的に包含されて存すること、理念の必然的過程として考へられ、従つてカントの意味に依つては結合の問題は考へられずして寧ろカントと逆に區別され、分裂され個別化されることに依つて發展、對立、體系、方法、本質等が説かれたのであると見るべきである。判斷の立場は有限性であり、従つてそれは辨證法的に無限の段階に沿つて發展しうるものとされ、その點に判斷の有限性に關する意味と無限性に關する意味が生じ、かくして個別性、普遍性の各内容が反省的に統一され、推理は概念と判斷との統一となることができる。斯くの如くにして分裂と綜合が

一つの活動として無限に繰り返されてゆく。それ故にヘーゲルに於ては精神は實に自己自身に對立し、自己の形態の形式を亡し、かくて新しき形成に向つて自己を高めてゆく。然も精神は自己の存在の殻を脱して單に他の殻の中に移るばかりではなくして、より純粹な精神として自己の以前の形態の灰の中から現れてくる。かくて世界史は神的過程の叙述であり、精神がその中に於て自己自身すなはち自己の眞理を知り且つ實現する段階行程の叙述である。眞理は無限であり、全體である。そしてかくの如き全體の本質はただその無限につゞく發展に依つて完成される大いなる綜合的なものである。然もヘーゲルに於ては、普遍は抽象的なものとしてでなく客觀的なもの、具體的な總體性 *konkrete Totalität* として把握されなくてはならぬ故に、有限者はそれ自身として單獨に存在するものではない。即ち有限者はそれ自身としては眞なるものではなくして、ただ無限的發展の一段階としての移り行きであり、自己を超出し行くこと *Uebersichthinausgehen* であり、そして無限、全體と關係して考へられることに依つてのみ、無限、全體の具體的な一部分としてのみその眞理性を有ち得るものである。個物、個人、民族精神の如きもの



も此の意味に於て理解されてゐる。ヘーゲルの普遍及び理念を單なる抽象的なものとして考へるのは眞にヘーゲルの精神を理解せしものではない。その論理に従へば抽象は生ける最も具體的なものとして把握されなくてはならぬ。そこにヘーゲルが通常の單なる一觀念論者であるなどと説明し去られることの出来ない理由が存する。どこまでも現實的と理性的とが同一なものとして把握されなくてはならぬ。かくしてあらゆる契機が夫々全體であり、そしてあらゆる移り行きは進歩であり、發展であり、全體的意味をその中に含有しそれと同一なるものとして措定され、精神は活動的且つ自己自身で存在するもの、すなはち自由であり、それは無限であり、絶對的な力を有てるものである。かくしてこの絶對的自由 *die absolute Freiheit* は自己自身の中に反省する運動として無限的に絶對的な否定性 *Negativität* を克服し解消することを目指したのであり、永遠に *an und für sich* に存在する理念は、永遠に絶對的精神として自己を活動させ (*sich betätigt*) 自己を産出し (*sich erzeugt*) 自己を享受する (*sich genießt*) のであり、かくして唯一の哲學の關心ともいふべき具體的な總體性乃至具體的統一、つまり概念が絶對者の完成に向

つてそこに遂げられるとされるのである。そして藝術的直観と宗教的表象とが一緒に把握されて單に一つの全體となつてゐるばかりではなくして、また是等二つのものは單純なる精神的直観へ結合され、そしてそれからその中に於て自己意識された思惟まで高められてゐる。然り、實に斯くの如き哲學的意味の統一に於てこそヘーゲルは哲學を藝術と宗教との統一となし、藝術と宗教とが一つの全體に結合されたる統一であると考へたのである。(註十)

是に由つて觀ればヘーゲルはまさしく其れ迄に嘗つて見られない世界思想史上の大組織、大綜合をなしたものであると言ふことが出来る。それは全理性、全理念、全精神の統一的把握であり、世界に於ける一切のもの、人間的なる一切のものの大綜合である。エルンスト・トレルチが『この思想の中には實に一切が合一されてゐる。これ以上大なる綜合を人は未だ嘗て見たことがない』(In diesen Gedanken ist in der Tat alles vereinigt. Eine größere Synthese hat man nie gesehen.) (註十一)と言へるは寔に尤ものことであると謂ふべきである。リヒャード・クローナーも言へるが如く、ヘーゲルは實に偉大なる綜合を考へたのであつた。文藝復興及び宗教改

革以來すなはち歐洲文化を決定的に規定する二つの世界力の分離せる以來、再び問題となつてゐた偉大なる綜合を考へたのである。それは更に詳言すれば古代希臘的文化と基督教的文化との統一であり、その二つを建築石材として第三(帝國 (das dritte Reich))を建設せんとしたのであり、それがヘーゲルの精神哲學に外ならなかつたのである。(註十二)故に『ヘーゲルの哲學に就いて或る豫備概念が何か與へられるとすれば、それはまさしくその世界性であり、その内實の範圍の廣さであり、ヨーロッパ的精神生活の全財産を自己の中に匿し且つ體系に結合する豐富なる諸理念である。そしてこれらの諸理念そのものがこの體系の根本理念を形成するのである』すなはちここには實に世界性の概念が呼吸してゐる。アリストテレスが希臘に對してなし、トマスが中世に對してなせしことをヘーゲルは近代に對してなしたのである。人はそこに人間的且つ世界的なる一切のものを統一し、綜合し、結合し、克服せんとする世界人としての哲學的意圖が呼吸してゐることを目を拭つて觀なければならぬ。

さて以上の如くヘーゲルにあつては結合の問題が説明されてゐるのであるが、

斯くの如きヘーゲルの辨證法の意味に關聯して必然的に導き出だされるものは自由の概念である。換言すれば、否定また否定を活動的に繰り返して内的必然的に分裂綜合を續け無限に發展しゆく理性並びに精神の行程は即ち自由に外ならないと見るべきであるからである。そして實にそこにこそヘーゲルは彼の世界性並びに歴史、從つてまた世界歴史の問題を精神を基礎として説いたのであり、時間の問題がまたそこに根本的に觸れられてゐるのである。ヘーゲルに従へば、世界史は自由の意識に於ける進歩であり、精神の行程が進歩であるといふ事を注意するのは本質的な事である。精神は自由である。そしてこの自己の本質を現實的ならしむること、この特質を遂げることが世界史に於ける世界精神の努力である。自己を知り、そして認識することは世界精神の行爲である。がそれは一度で完成されるものではなくして段階行程に於て完成されるものである。個々の新しい民族精神は自己意識の獲得、自己の自由の獲得への世界精神の克服に於ける一つの新しい段階である。(註十三)世界精神は低い規定から自己自身により高き原理へ、概念へ、自己の理念のより發展せる叙述へと進歩してゆく。即ち精神の考

察される舞臺は世界史である。(註十四)かくて叙述されたもの、産出されたもの、實現されたものとせらるる限りに於て世界史は考察される。そしてまた「本質」Wesen は「あつたこと」Gewesen であるとも彼に依つて考へられてゐる。その點にヘーゲルが時間的に過去を重んじ歴史主義的であつた點が考へられないではないが、それかといつてこの一面だけを以つて直ちにヘーゲルを歴史哲學者(Geschichtsphilosoph) としてのみ見るのは餘りに一面的な見方である。その辨證法的發展の思想のうちに、如何に過去のものをすべて止揚し含有してゐるといふ過去の一面ばかりではなくしてまたその他の一面として如何に未來的可能的な思想が含まれてゐるかを看取しないのは眞にヘーゲルを理解せし事ではないであらう。(註十五)次に斯くの如き精神の自由の意識に於ける進歩としての歴史は、ヘーゲルに依れば、それは時間の中に(in der Zeit)展開される。世界史は一般に時間に於ける精神の展開である。全精神はたゞ時間の中にのみ存し、歴史は時間に沿うて(an der Zeit)展開された精神である。(註十六)そして彼は歴史の發展が時間の中に起るといふことは精神の概念に適應してゐることとなし、時間は否定的

なものの規定 *Bestimmung des Negativen* を含んでゐる、即ちそれは一つの出来事が積極的に吾々に對して存在し、然も且つその反對も存在し得るといふ、この非有 *Nichtsein* との関係が時間であるとなしてゐる。(註十七) つまり時間は有を含むのみならずまた非有をも含み得る。非有をも含み得る時間は存在論的に最も基礎的なものと考へられることが出来る。非有、無、否定の問題はヘーゲルの辨證法的論理の本質に關するものとして極めて重要であることは既に述べしところに依つても明白であるが、ヘーゲルがその時間論に於て否定をその本質とし、時間を『否定の否定 (*Negation der Negation*)』として解釋せしことは(註十八) またそれが辨證法的否定的意味を有するものとして吾々の最も注意すべきところである。すなはちヘーゲルに於ては時間はアリストテレスの論ずるところに従ひ、今、今、今……といふ今の連続である。(註十九) 時間を線とすれば、『今』は點に相當する。一つの點といふものはあらゆる他の點を否定して存するものである。空間に於けるその一點を指すことに依つてその一點を限定し、他のあらゆる空間や點を否定せるものである。故に點は否定である。さて時間は今、今、今……の連続であつて、『今！』

と吾々が言ふときもはやその『今』は既に過ぎ去り、次の『今』が來りて現在となり、前の『今』は否定されてゐる。即ちもはや『今』ではない。そしてまた同様にして順次に次、次、次の『今』が考へられる。即ち時は『今』の絶えざる否定であり、その連續である。換言すれば時は『今』の否定である。點の否定である。つまり『否定の否定』である。そして點の否定すなはち否定の否定はヘーゲルに依れば『點』であること』（又は點性、Punktualität）である。依つてハイデツカーの言へるが如く點性としての否定の否定がヘーゲルに従へば時間なのである。またハイデツカーに従へば、ヘーゲルは空間を點と考へずして、點性と考へ、（註二十）その根據よりして空間を基礎づけるのに時間を以つてし、空間は時間であるとなした。換言すれば、空間の眞理を時間であるとなした。（註二十一）

これに依つても明なるが如くヘーゲルもまた時間を一より説いてゐる。そしてそれは彼が精神又は理性を絶對的な一より説き、その一なる根源的な Kelch より言ひ得べくんば流出的に内部より現れ出で來るものとなしてゐることを聯想せしめる。すなはち彼は時間を ein absolutes Außersichkommen つまり一者、換言すれ

ば『今』といふ時間點の産出であるとなしたのである。(註二十二)ここに吾々は否定の否定としての時間の辨證法的自由の意味を見るべきである。一より否定の連續に依つて無限に擴がる時間はまた一より無限に辨證法的に發展する精神と同類であると考へられる。即ちハイデッカーの言へるが如く『ヘーゲルは時間の中に於ける精神の歴史的實現化の可能性を否定の否定としての精神と時間との形式的構造の自己性(Selbigkeit)に關して示してゐるのである』(註二十三)そして『精神と時間との聯關のこの形式的辨證法的な構成が一般的に考へられ得るといふことは、この精神と時間兩者の根源的な類縁關係 eine ursprüngliche Verwandtschaft を現はしてゐる』と見るべきである。かくして吾々はヘーゲルが世界史は一般に時間に於ける精神の展開であるとか、全精神はたゞ時間の中のみ展開されるとか、『眞なる現在にかくて永遠である』(註二十四)といふことの意味を更に明に把握することが出来る。すなはち『時は自己に於て完成せざる精神の運命及び必然性として現はれる』(註二十五)斯様にしてヘーゲルに於ては精神、従つて歴史は時間と必然的關係を有し、時間の概念を考へずしてそれらを説明することは不可



能である。

以上吾々はヘーゲルに於ける結合の問題の根本義がやがてその自由、發展、世界史、精神、從つて時間の問題となるべきことを明にした。

尙ほハイデッカーに依れば『精神は始めて時間の中に生ずるのではなくして、時間性の根源的な時來性(Zeitigung)として存在するのである』また『精神は時間の中に生ずるのではなくして、つまり、事實的な生存が根源的本原的な時間性から歸屬(Verfallen)せしものとして生ずるのである』(註二十六)と。また以てヘーゲルの時間と精神との説を更に一步突き詰めたるものと見ることが出来るであらう。

(註一) 尙ほこれに關しては時間の問題(それは實に多くの哲學的な問題面を包含してゐる)を結合の問題の側面から研究せる拙論、哲學雜誌五四五、五四九號……所載の『Nova scientia』の基礎概念としての結合(時間論のドイツ觀念論史的耕鋤的研究の一側面として)を参照せられたし。蓋しこのヘーゲルに關する拙論もその基體に於ては該論文との姉妹篇、否該論文の一部分として方向づけられてゐるものである。

(註二) かゝる論據は無數にあれども例へば『Phänomenologie d. G.』、グロククナー記念版 S. 335 以下、『Wissenschaft d. Logik』のラッソソ版第二卷 S. 408、以下、『Encyclopädie d. Ph. W. i. G.』の S. 214、並

に „Die Vernunft i. d. G.“ ラッソン版 S. 9 の如きを参照。尙ほ以後ヘーゲルの著書につきてキストの頁数を述べる場合には „Ph. d. G.“ をグロックナーの記念版に依る外は總てラッソンによる哲學文庫版に依ることとする。

(註三) 例へば „Encyclopädie ……“, S. 166, 167. „Wissenschaft d. Logik I.“ S. 76, 82 等参照。尙ほヘーゲル哲學と華嚴學又は天台學との歴史的關係が如何様であるにもせよ、そして又その説き方の構造が如何様に相異するものであるにもせよ、その本質的なる結論に於てヘーゲルのかくの如き説き方が全く華嚴學、天台學に於ける相即相入、無礙の思想と一致符合せるものであることは刮目するに足る事實であらう。かくて若しいはゆる『日本新ヘーゲル學派』の如きものが存在し得るとすれば、そして又存在せしめんとすることが理由あることであるとするならば、かくの如き課題もまたその關心せざるべからざるものの一たるべきであらう。ヘーゲルの思想はたとへそれがかりに全く希臘的、アリストテレス的のものであるにもせよ、(例へば Verhandlungen des zweiten Hegelkongresses 1931 in Berlin) 中の J. Stenzel に依れる „Hegels Auffassung der Griechischen Philosophie“ (参照) 又はドイツ的思惟の完成であるにもせよ(例へば N. Hartmann: Die Philosophie des deutschen Idealismus, II., Hegel 参照) 極めて東洋哲學的などころがあり、印度、支那の思想、佛教等に極めて深く本質的に觸れたものがある。この契機を確把握すればより廣範圍の基礎の上に立つ眞に世界的人間的なるものが哲學的に打ち建てられることが考へられるであらう。そしてその意味に於いてそれはクロナーも言へるが如く(例へば „Von Kant bis Hegel“ II. Grundzüge der Philosophie des Geistes, S. 255—266) なる

ヘーゲル哲學に於ける結合の概念

参照)ヘーゲルの目指した方向を更に一步進めることであり、而してそれを做すのはヘーゲルに對する所謂現代ヘーゲル學徒の爲すべき義務の一つであらう。ヘーゲルが當時のドイツ人としては最もよく東洋を知れるものの一人でありし事はその著書に依つても直に了解し得られる。が當時の彼としてあれ以上多く知らうと思つてもそれは出来なかつたのであらう。若し夫れヘーゲルの東洋に關する知識の誤謬點等を一々その著書に就いて指摘し、その貧弱にして杜撰を極めしものたりし事等を徒に嘲笑するが如きことは眞にヘーゲルを愛する所以でなく、またヘーゲルの眞意に遠きものであり、ヘーゲルの遺憾となすべき所であらう。日本に於けるヘーゲルの流行もはや過ぎようとしてゐる。ヘーゲルのテキストを讀んでゐると思はれる論文の數へるばかりなる寥たる中に既に過ぎようとしてゐる。が之に際し二三のよき翻譯も試みられたようである。然しながら正當にみて日本に於けるヘーゲルの眞正なる深き理解はこれからであらう。そして吾々にとつて先づ第一に重要なことはヘーゲルの眞の精神を把握しそれを生かさんがためにクローチエの試みしが如く、ヘーゲルの述べし事柄の中で現代に今尙ほ生きてゐるものと既に今は死して無意味なるものとをえり分けることであらう。

(註四) Encyclopädie, § 60 参照。

(註五) W. d. Logik I. S. 35. 38 以下又は Encyclopädie, § 81, 83 等参照。

(註六) 例へば Ency., § 215. W. d. Logik I, S. 68, 79. 及び ibid. II. S. 486. ibid. I. S. 35. 並に Die Vernunft i. d. G., S. 4—5 等参照。

(註七) 例へば Encyclopädie. § 572—573. ハンストナムの『形而上學』十二の七参照。

(註八) 例へば Encyclopädie. § 166. 及び W. d. Logik II, S. 266, 267 等参照。

(註九) 例へば W. d. Logik II, S. 491. Phänomenologie d. G. の DD. 及び S. 602—620. Vernunft i. d. G., S. 33 等。

(註十) 例へば „Phä.“, S. 24, 614—620. „Ency.“ § 160, 386, 573. W. d. Logik II, S. 486—490. Vernunft i. d. G. S. 11. 並びに M. Heidegger : Sein und Zeit I, S. 434 等参照。

(註十一) Ernst Troeltsch : Gesammelte Schriften, III 1922. 及び Der Historismus und seine Probleme の『歴史的發展概念と世界史に就いて』の中の『ヘーゲルの辨證法』参照。

(註十二) R. Kroner : Von Kant bis Hegel, II. の VII Ab. 殊にその S. 255—266. 参照。

(註十三) 若しファッショ乃至民族主義または國家主義の精神的意義にその哲學的基礎づけが可能なりとすれば、ジェンテーレの所説を俟つまでもなくヘーゲルの斯かる意味に於ても成立せしめられることが出来るであらう。

(註十四) 例へば Encycl. § 548—552. Vernunft i. d. G., S. 40—52. 130. 並びに Heidegger : Sein u. Zeit II, S. 434 参照

(註十五) この事に關しては私はまた他日少しく詳細に一論文を草してみたいと考へてゐる。

(註十六) 例へば „Phä.“ S. 521, 618—619. „Vernunft ……“ S. 134. 尙ほハイアッカーの『存在と時間』の上掲の場所、及び上掲せるニコライ・ホルトマンの『ドイツ觀念論の哲學』第二卷『ヘーゲル』の S. 289 以下の如きを参照。

(註十七) Vernunft i. d. G., S. 133. の時間と非有との關係は既にカント圖式論に於て、すなはち性質の

ヘーゲル哲學に於ける結合の概念

圖式に於て指摘されてゐるところである。尙ほ之に關しては拙論『ノバスキエンチャの基礎概念としての結合』(時間論のドイツ観念論史的耕作的研究の一側面として)(其の二)(哲學雜誌五四九號)を参照せられたし。また Heidegger : *ibid.* S. 429 参照。

(註二) Encycl. § 257 以下参照。尙ほ以下述べらるるが如きヘーゲルの時間論の否定性、點性等に關してはハイデッカーの „S. u. Z. I.“ の第七章 § 78 以下、殊に S. 429, 431, 432 等を併せ見るべし。

(註三) かくの如き『今』の論に關しては近日發表の拙論『アリストテレスの時間論』及び『アウグスティヌスの時間研究』(哲學雜誌五三九號)を参照せられたし。またハイデッカーの『存在と時間』の上掲の場所を参照。尙ほこれに依つても明なるが如く、ヘーゲルの時間論はアリストテレスのそれを繼承發展せしめしものである。そのことはハイデッカーも指摘せるところである。S. 432. の脚註参照。

(註四) Encycl. § 254 Zusatz. Heidegger : S. u. Z. S. 429 等参照。

(註五) Encycl. § 257 Zus. Heidegger : *ibid.* S. 429.

(註六) 例へば W. d. Logik I, S. 182.

(註七) Heidegger : „S. u. Z.“ S. 435.

(註八) 例へば Encycl. § 259 Zusatz. Heidegger : *ibid.* S. 431. 等参照。

(註九) 例へば „Phä.“ S. 613. Heidegger : *ibid.* S. 435. 尙ほ M. B. Foster : Die Geschichte als Schicksal des Geistes in der Hegelschen Philosophie, 1929, Tübingen. 等参照。

(註十) Heidegger : *ibid.* S. 436. (終)